



夜遅くまで続く「有東木の盆踊り」 静岡市葵区、全日写真村越敏治さん撮影

「慰霊の夏」に祈る



「吊り上げ」の三十三回忌に当たるので、事故後初めて尾根に来た遺族もあった。この日を、遺族とは違った思いで迎える人がいる。あの事故で奇跡的に助かった4人である。

その1人に、自衛隊へのリコプターで救出された映像が流れた少女(当時12歳)がいた。入院先の病院には全国から激励の手紙とプレゼントが寄せられた。

当時、全国紙の社会部記者だった私は、少女の手記を入手した。右手をけがして、左手で書かれた便箋には「おみまいありがとう」と書かれていた。あの少女も44歳になった。どこかで、あの事故で失った両親と妹を思い出しているに違いない。

静岡市の中心街から車で約1時間、安倍川上流の有東木地区では8月14、15日、国の重要無形民俗文化財の「有東木の盆踊り」が行われ、江戸時代から続く伝統の踊りが夜遅くまで続いた。

死者をしのび、家族を思いながら、列島各地で「慰霊の夏」は真つ盛りである。

8月は「慰霊の月」である。太陽暦8月15日を中心とした「お盆」には、墓参りや家族の安寧を確かめるため故郷を目指す人たちの大移動が道路や鉄道にあふれる。それぞれの故郷では伝統の祭りや盆踊りが繰り広げられて、人は祖先や家族への思いを深める。

8月15日が先の大戦の「終戦の日」であることも、慰霊の月を印象付けている。「ヒロシマ」と「ナガサキ」の平和への祈りを経て、お盆と重なる15日、「慰霊の念」はピークとなる。

鎮魂の思いは人それぞれだが、毎年この時期をとりわけ深い思いで迎える人たちがいる。32年前の1985年8月12日、群馬県・御巢鷹の尾根に墜落した日本航空ジャンボ機事故で亡くなった520人の遺族たちである。32年間、この日に必ず慰霊登山を続けた遺族もいる。今年も仏教でいう

前静岡県監査委員・
富永久雄